

集落自主活動に係る伴走支援事業
福島大学×二本松市北戸沢保全会
実施報告書

2026 年 2 月 28 日

福島大学行政政策学類

岩崎ゼミ

はじめにー活動の概要

(1) 活動の目的

今年度で最終年度となる北戸沢地区での大学生事業では、「集落史～戸沢地区の“これまで”と“これから”」を完成させることを目的とした。

(2) 今年度の活動内容

今年度行った活動は以下の通りである。

- ①保全会総会への参加、顔合わせ（6月15日）
- ②Instagramでの発信開始（6月～）
- ③保全会の草刈り活動の手伝い、交流会（7月6日）
- ④白鬚神社例大祭準備作業への参加（10月11日）
- ⑤白鬚神社の例大祭への参加・針道のあばれ山車見学（10月12日）
- ⑥現地打ち合わせ（10月26日）
- ⑦住民の方へのインタビュー調査（11月16日）、保全会活動の見学・手伝い
- ⑧住民の方へのインタビュー調査（11月30日）、芋煮交流会
- ⑨「集落史」の編集活動（12月～）
- ⑩福島県報告会（2026年2月11日）
- ⑪現地報告会（2月22日）

今年度は昨年度に行うことができなかった若者や女性への聞き取り調査に重点を置いて活動した。その結果、地区の課題や将来像について多面的な意見を伺うことが出来た。

(3) 活動の成果

「集落史」を2月22日の現地報告会でお披露目したところ、多くの住民の方から喜びの声をいただくことができた。

活動では、歴史を振り返り、記憶として残す取り組みの重要性を認識できた。地域を形作ってきたものは今までそこで生活をしていた住民であり、話し手と聞き手の両者の対話の中で地域の在り方を認識することによって、地域のアイデンティティがより確立されていくことを感じた。そして、「ここに生まれてよかった」「これからも、この地を守り育んでいきたい」という思いを地域で共有するための取り組みを進めることができた。

今後は、「集落史」を全戸に配布し、保全会メンバー以外の住民の方や他出たご家族とともに共有する活動をしていきたい。

以下に、「集落史」（個人情報に記載されているページを除いたもの）を掲載する。

2025年度 集落史

北戸沢の"これまで"と"これから"

福島県二本松市北戸沢地区



目次

1章・戸沢地区の概要	
1. 基本データ	3
2. 戸沢地区の主要スポット	4
2章・戸沢地区のこれまでと現在	
1. 過去の戸沢	5
2. 現在の戸沢	8
3章・戸沢地区のこれから	
1. 戸沢の魅力 戸沢の課題	13
2. 戸沢のこれからのために	14
4章・北戸沢保全会のひとびと	15
資料・しめ縄の作り方	36

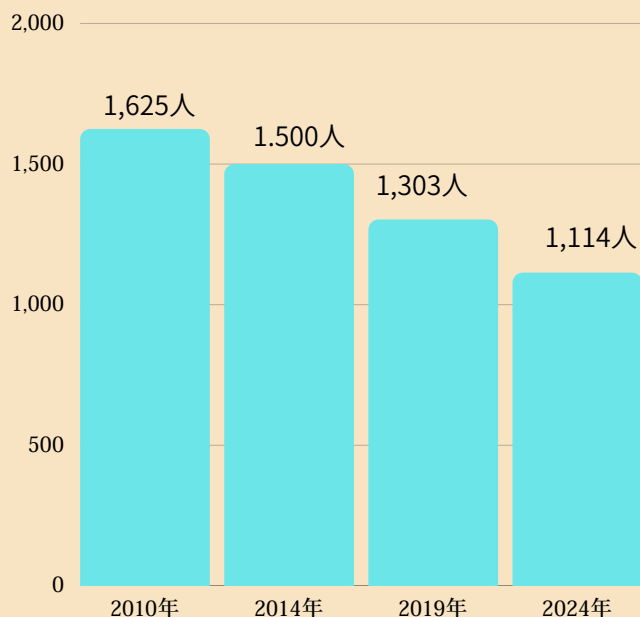


第1章 戸沢地区の概要

1-1 基本データ

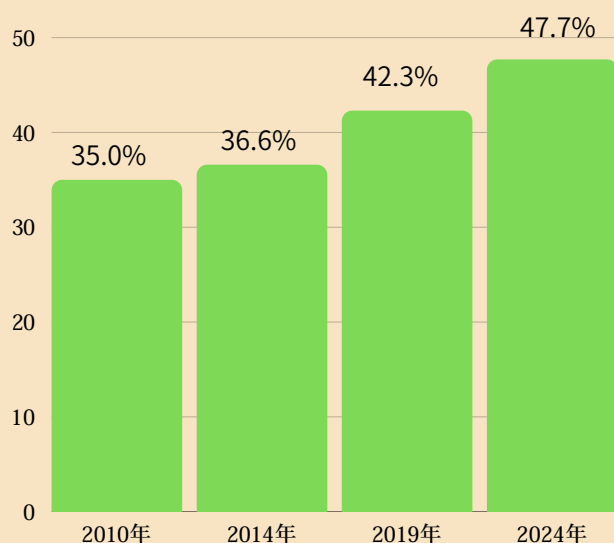
二本松市の東部に位置する戸沢地区は、阿武隈高地の緩やかな山々に囲まれた、自然豊かな農山村地域です。かつては東和町の一部であり、現在は二本松市の「東和地域」を構成する重要な一角を担っています。

戸沢地区 総人口の推移



時代の流れとともに人口は減少していますが、戸沢を愛し、この地で共に暮らす人々の絆の深さは今も変わりません。

高齢化率の推移



65歳以上の人口が占める割合（高齢化率）は、2024年時点で47.7%に達しており、高い水準にあります。

戸沢地区の人口ピラミッド



戸沢地区の人口ピラミッドを作ってみると、30代以下の人口がきわめて少ないことがわかります。

経験豊かな人生の大先輩方が多く活躍されており、戸沢の歴史と知恵が次世代へと大切に手渡していく必要があります。

1-2 戸沢地区の主要スポット

1. ななくさ農園（地域交流のフロンランナー）

東京からのIターンで戸沢地区に移住された関さんが運営する農園です。有機農業を軸に、ホップの栽培からクラフトビールの醸造まで幅広く手掛けています。単なる農園にとどまらず、農業体験や移住希望者の滞在受け入れも積極的に行っており、戸沢と外部をつなぐ新しい交流の拠点として注目されています。

2. 白鬚神社（歴史と住民の絆）

1380年、九州の菊池神社から勧請されたと伝わる歴史深い神社です。南北朝時代に後亀山天皇の命を受け奥州へ下った菊池一族の足跡を今に伝えています。かつては山車が区内を練り歩くなど賑やかな祭礼が行われていました。2024年には住民の寄付によって参道の階段が修繕されるなど、今も地域コミュニティの心の拠り所となっています。

3. 愛蔵寺（文化と行政の旧中心地）

真言宗豊山派の寺院で、かつては「岩代の国で唯一の真言密教寺院」として隆盛を極めました。明治期には戸沢村役場や寺子屋が置かれるなど、地域の政治・文化の中心地でもありました。境内には、火災の際に守り札が飛来したという伝説を持つ「護摩ザクラ（町指定天然記念物）」があり、かつては多くの花見客で賑わいました。

4. 最勝寺（伝説が宿る高野槇）

境内にある「コウヤマキ（高野槇）」が、旧東和町指定の天然記念物として親しまれています。この木には、菊池氏の先祖である則隆（のりたか）の霊が宿っているという不思議な言い伝えがあり、地域の歴史と信仰が結びついたスポットです。

5. 香野姫神社（養蚕文化の守護神）

その名の通り「蚕の神様」である香野姫を祀っており、この地がかつて絹織物や養蚕業が繁栄していた歴史を物語っています。境内にある町指定文化財の「夫婦桜」は、寄り添うように咲くその姿から地域のシンボルの一つとなっています。

6. 田向の湯（生活に根ざした恵みの水）

古くから地域住民に活用されてきた冷泉です。弱アルカリ性の性質を持ち、美容に良いとされ、かつては自宅のお風呂に混ぜて利用するなど、豊かな水の恵みが暮らしの一部となっていました。

7. 旧北戸沢小学校跡（学びの記憶）

かつての子どもたちの教育の場です。地域の特徴を活かした作物を育てる課外授業が行われるなど、地域密着型の教育が実践されてきた、戸沢の記憶が詰まった場所です。

第2章 戸沢地区のこれまでと現在

2-1

過去の戸沢

インタビューを通して、かつての戸沢で営まれていた暮らしの姿が見えてきました。ここでは、子どもの頃の遊びや若連の活動、災害や生活の変化、年中行事のにぎわいなどについて皆さんから聞いたエピソードを紹介します。

■子どもの頃の遊びと暮らし

かつての戸沢では、自然の中でのびのびと遊ぶ子どもたちの姿が日常の風景でした。

兄弟と一緒にチャンバラやかくれんぼ、秘密基地づくりに夢中になったといえます。山や畑は格好の遊び場で、「梅に塩や砂糖をかけて食べたり、人の畑の野菜をこっそり食べたりした」というやんちゃな思い出を語ってくれました。

忍者ごっこに、めんこ、ビー玉、缶蹴り、かくれんぼ。冬になれば雪合戦。遊びも手伝いも、いつも仲間と一緒にでした。北戸沢小学校へは、十郎内のバス停から先生と一緒に歩いて通い、先生の荷物を持ちながら、にぎやかに二キロの道のりを歩きました。家に帰れば、仕事が待っていました。井戸から水を汲み、火を起こし、風呂を沸かし、田んぼでは稲刈りに脱穀、鍬を使って畑を耕したそうです。

子どもの頃はコマ回しなどの他に、「下駄スケート」という遊びをよくしていました。レールのようなものが付けられた下駄で、凍った田んぼの上を滑るというものでした。

■若連を通じた地域青年たちのつながり

青年期は多くの方が若連に加入し、活発に地域活動を行っていました。

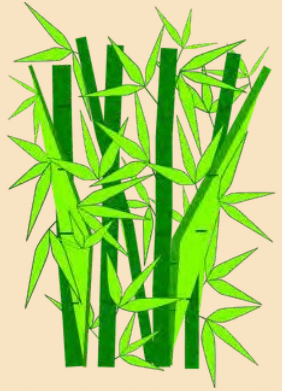
多い時には四〇人位が活動していて、みんなでわちゃわちゃする感じが楽しかったそうです。花やみこしの飾りの作成、神社の周りの片づけ、舞台の作成など、様々な活動をしていました。一番楽しかったのは「笠貫」という祭りが終わった後の飲み会だったそうです。

秋祭りでは、俵神輿という神輿を戸沢6区・7区・8区の若者で担いでいたそうです。祭りは三日間開催され、その間は神社に寝泊まりしていました。俵神輿を担いだまま家の中へ上がることを許されていて、ご利益があると言われて、酒やおにぎりも出してもらったと、懐かしそうに話されました。

秋祭りでは、若連が前日から神社に泊まって会食をし、村の人たちが仮装して芝居もしていました。祭りが開かれるときは皆が出稼ぎから帰ってきており、盛り上がっていました。

若連をきっかけに消防団に入団し、現在は地区のリーダーの人として月一回の見回りや消火活動を行っています。「地域のために動くことが当たり前だった」という言葉が印象的でした。





以前は地域資源である木や竹を使う企業が盛んで多くの雇用を生んでいましたが、今では後継者不足により、産業の継続が難しい状況になってしまいました。山にある竹も、稲刈り後の稲を干すはざかけに利用されていましたが、今ではそれもなくなってしまい山の荒廃に危機感を持っています。

子供が少なくなったこと他に、隣同士が分からなくなってきてしまったことが地域の大きな変化だといえます。昔はご近所づきあいが当たり前で、食べ物近所にお裾分けしていましたが、今はやらなくなってしまいました。「昔はね、隣のばあちゃん、じいちゃん何やってるかなって声掛けなどしたけども、今はそういう声掛けなんてぜんぜんしてないもの。かえって声かけると変に思われちゃって」といいます。

若い頃と現在の農業を比べて、大きく二つの変化を感じています。一つは手作業から機械になったこと。昔は鍬で掘り起こしていましたが、今は機械化が進みました。昭和三年に鍬の代わりに耕す「マメトラ」を買ったそうです。もう一つは温暖化などの気候の変化です。「一〇月になっても稲が刈られていない風景は今まで見たことがなかった」といいます。

子どもの頃や若い頃と今とは、農業や日々の暮らしは大きく変わりました。昔はチェーンソーで木を切ったり、養蚕をしたり、また個人の山があり、薪を割ったり、堆肥を作って田んぼに入れたり、作った炭を売ったりと自給自足の生活をしていました。羊や鶏、タヌキ、ヤギなどがあり、肉を隣所で分け合ったり、乳しほりもしていました。植林や薪・炭づくりはかつて皆がしていたことであり、里山は暮らしになくてはならない存在だったといえます。

昔は子供との交流も活発で、魚の手つかみや生き物観察、子供神輿で地域を練り歩くお祭りもありました。「昔は、どここの子供だって全部わかったよ。でも今は声をかけると不審がられる」と寂しそうに話されていました。

「若者が地域で活動する機会が減り、青年団以外にも楽しみが増えた。人手不足はつながり不足にもつながっている」と話していました。現在は、公民館の青年学級なども人が集まらず、開催出来ないことが多いといいます。一方で、「東和つながるマルシェ」など新しいつながりも生まれていることに希望を見出しています。言葉に出して、形にしていくなが大切で、口に出さないと行動に出せないと語ってくださいました。



2-2 現在の戸沢

キーワード1. 北戸沢保全会

■北戸沢保全会とは？

2007（平成19）年に、「農地水保全向上対策」（現「多面的機能支払」）を実施するために、戸沢7区を中心に行政区横断的に設立されました。当初は「戸沢7区保全会」でしたが、徐々に対象農地を拡大したことから「北戸沢保全会」に改称されました。

現在、会員数は65戸で、対象農地面積は、田が18.5ha、畑が6ha、草地在2haです。

交付額は110万円で、里山の寄切（密生した枝を伐採して日光や風通しを良くし、樹形を整えること）、農道や水路の自力施工による補修、改修を実施しています。

参加者数は毎年、のべ200～300人にのびります。

皆で協力しながら地域資源を共同で管理する大切な組織です。



■保全会の意義と課題

「保全会の活動の中で、側溝やU字溝、畑の管理を行ったことや、大学生事業を呼び込めたことは地域にとってプラスになっている。一人でやっていたことが、みんなで協力する形になったのは大切なかなって思う。」

「この土地をみんなで守っていくって考えを持った人たちが集まったからね。声かければみんなすぐ集まってくれたから楽しかった。整備された風景を見ると、やってきたことは無駄じゃなかったと思う。」

「草が生えて景観が悪いので、草刈りをするのが活動していて良かった。山や田畑が荒れてしまうと鳥獣被害が出てくるので、今後も続けてほしい、続けていかなければ。」

「荒れたままじゃ、もったいない。草を刈るだけで終わらせず、できれば作物を植えたい。学校に声をかけて、子供たちや大学生と一緒に畑を耕し、作る喜びを伝えたい。」

「人が繋がるきっかけを保全会に求めて若い方も入ってもらえると、地域が繋がっていきける。山と結びつけて農業をとらえていくこと、里山をもっと活用したいと思えるような政策誘導も必要。」

キーワード 2 . 白鬚神社

■白鬚神社とは？

1380(康暦2)年に九州熊本の菊池神社から勧請されたと伝わる由緒ある神社です。菊池氏は九州肥後国の名門・菊池氏の一族で、南北朝時代に南朝・後龜山天皇の命で奥州に入り、小手森(現在の福島県二本松市針道)一帯に領地を得ました。1585(天正13)年家督を継いだばかりの伊達政宗が、小手森城のある東安達地方(現在の福島県二本松市阿武隈川東岸)を来襲し、菊池顕綱をはじめとする城兵だけでなく城に籠もった女・子どもなど約800人を討ち取ったという言い伝えがあります。(『東和町史』)

2024(令和6)年には住民から寄付金を集め階段の整備が行われ、現在でも住民たちにとって大切な場所となっています。



■白鬚神社例大祭の概要

五穀豊穡などを願うお祭りです。保全会に参加している人など農業に関わりのある住民が白鬚神社に集まります。米や酒、赤飯を入れた藁包み等を奉納します。神主による祝詞奏上を終えたら、参加者で盃を交わします。



■かつての例大祭の様子

10年ほど前までは祭りで山車が6, 7, 8区内を練り歩いていたこともありましたが。

その頃の祭りの規模は大きく、仮装、紙芝居、演技会なども開催されていたそうです。隣町から映画館が出演するなど、映画や芝居も祭りの一部として行われ、地区の祭礼の舞台として、住民たちが交流する場となっていました。祭りの時期には出稼ぎから帰ってきた人も多かったそうです。

青年の集いとして結集された「若連」は、3日間に及ぶ秋祭りの前日から神社に集まり、お酒を飲んだり会食をしたりして盛り上がりました。泊まり込みでステージを作るなどの準備をして、地域の文化的な行事を支えていました。

祭りの規模は近年縮小し、現在では山車を使用した練り歩きは行われなくなっています。しかし、氏子の集まりなど、祭りの精神を引き継ぐ活動は続いており、今でも神社での伝統的な行事や交流が行われています。



2025年度 白鬚神社例大祭 現地レポート！

2025年度の例大祭は10月11日に準備、12日に本祭、13日に後片付けが実施されました。
11日と12日は岩崎ゼミも参加させていただきました。
参加したことで分かった現地の様子についてお伝えします！

■11日



・神社の装飾としめ縄づくりを行いました。
本祭に向けて準備を整えました。

■12日



・神主さんは祭りのために県外から来てくれたそうです。
・20人ほどの住民の方が参加していました。
・途中で地元の子供たちも顔をのぞかせていました。
・例大祭が終わると住民の皆さんはお酒を飲みながら楽しそうに交流していました。私たちが混ぜてもらいました。

■しめ縄作りの様子

藁（わら）

しめ縄用の特別なワラで長い こがねもちを使用
しめ縄用に植える 実がならないうちに刈って干す

【準備するもの】

- ・乾燥した稲藁
- ・麻紐
- ・ハサミ
- ・作業しやすい広さの場所

※藁は作業前に軽く湿らせると折れにくく、撚りやすい



- ① 藁の下の方の余分な葉を取る
- ② 5～6本の藁の束を30個作る
- ③ 束を継ぎ足しながら、ひねって縄にする
- ④ 整えて完成

キーワード3. 「結」文化

■結文化とは？

農村社会に古くからみられる慣行で、**農家相互間で互助的に行う協同労働のこと**を指します。

「結」の語源は、「結う」、「結ぶ」、つまり、結合あるいは共同を意味する言葉からきています。

田植えのような短期間に労働力を必要とし家族労働だけで足りない場合に、複数の農家が労働力を出し合い、それぞれの家の田植えを順番に行っていくというものです。



・お父さんが出稼ぎに出ている間はお母さんがずっと頑張って田んぼをつくっていました。当時は、「結」の仲間が10件くらいあって、お互いの仕事を手伝い合うという関係性がありました。こちらの作業が終わったら次は向こうに行って手伝うという「結返し」も行われていました。

・昔は、自給自足ということもあり互いに助け合って生きていました。誰かに頼み手伝ってもらった後に、その頼んだ人の家に行きまた手伝うことを、「結作業」と言い、田植えや稲刈り等の大きい作業をする際にお互いに隣に頼んだり、親戚に頼んだりしていた。何でも協力し互いに助け合うことによって地域で暮らす人々の顔が見えたといいます。

【移住者の意見】

- ・口は悪いが人はいい。保全会のような行政区の横断的なつながりがある、神社や水陸組合などのつながりもある
- ・機会やタイミングがあれば受け入れてもらえる。受け入れてもらえたらばすごくやりやすい
- ・ここに来たばかりの時に、小学生を集めてイベントをやられてて。子供いるんだからおいでってすごく温かい感じだった。自分の地域ではそういうことがなかったので、いい地区なんだなって思った。実際に試してみるまでは少し抵抗感もあるけど、行ってみたらすごい皆さんいい人ばかり。本当に参加してよかったなって思っています
- ・ゆるい感じがいい。皆さんいい人たちだし、干渉とかしないけども、いろいろ助けてくれる
- ・戸沢のほうではいろんな人と付き合いができて、少しずつ溶け込んでいける。移住してくるとそういう場所ってというのは大事

【地元生まれの方の意見】

- ・「ああいえばこういふ」関係性があり、交流が活発。和気あいあいとしており、距離感が近い

【共通点】

- ・かなり密接な関係性である
- ・稲刈りのような家族行事に近所の人々も関わる
- ・保全会や例大祭など、交流する機会が数多く存在している
- ・身近な人々に対して愛着がある
- ・人が暖かく、人柄がいい

キーワード4．麦文化

■麦文化とは？

「…東和地域は山間地にあり、耕地が少なく、生産される米の量も少ない状況にありました。そして、米は高く売れるので出来るだけ多く供出し、少ない自家保有米に麦を組み合わせることによって東和地域の食生活が成り立っていました。また、麦は稲作とは作業が重複しないように工夫されていました…」(『東和町史』)

このような理由から戸沢を含む東和地域の家では、手打ちうどん等の麦を利用した料理が出されていました。このような東和地域独自の麦にまつわる文化のことをいいます。

・手打ちうどん

私達福島大学生も11月30日の活動にて、手打ちうどん体験をさせていただきました。作り方を教えてくれた手打ちうどん名人の方は、お店を営んでいるわけではなく、「うどんが好きだから」という理由で日常的に手打ちうどんを作っている方でした。その姿から、東和地域に麦文化がしっかりと根付いていることを実感しました。



①塩50gを水500mlで溶く。
木鉢に小麦を入れ、水をかけて
まとめるのを繰り返す。



②踏んで広げてまとめてを繰り返す。



③最後に切ったら…



完成！！

・ビール

保全会に所属している関さんは、保全会活動などの地域の集まりがある際に、ご自身が醸造されているビールをふるまってくれます。

7月6日のフィールドワークの際に、私たちもいただきました。



↑ 保全会の作業後にビールをふるまう関さんと住民の皆さん

第3章 戸沢地区のこれから

①戸沢地区の魅力

戸沢地区の最大の魅力はそこに暮らす「人」だと強く感じました。

聞き取り調査では、ほとんどの方が人柄の良さや、人とのつながりの強さを地域の好きなところとして挙げてました。

移住者もあたたかい雰囲気迎え入れる風土があり、この雰囲気が活動への参加のしやすさにつながっています。

助け合いは日常的なものであり、「結」の文化や屋敷づきあいを通じて、人とつながることの良さを実感しながら生活している方が多い印象を受けました。

また、若者と高齢者が一体となった活動が多いと感じている意見もあり、保全会が地域をつなぐ横断組織として機能している点も戸沢地区の特徴です。

さらに、あばれ山車や正月・盆棚の風習、季節行事を大切にする姿勢、田畑や里山の美しい景観など、自然と伝統が共存している点も、地域の誇りとして今後も維持していくべき要素です。

②戸沢の課題

○中山間地域に共通してみられる課題

住民の声として特に多く挙げられたのは、高齢化や若者・地域を支える人材の不足の深刻化です。雇用の場が十分でないことが若者不足の原因の一つとして考えられます。

また、公共交通機関が限られているため、車が無ければ買い物や病院に行くことが困難です。特に、免許返納が求められる高齢者の移動手段の確保が大きな課題となっています。

地域の課題と聞くと利便性を求める声が多い中で、文化的な学びや経験ができる拠点を求める意見もあることが印象的でした。

○地域組織特有の課題

地域活動の担い手が固定化していることも課題の一つだと感じました。これは、若者が地域活動の参加に消極的であることが原因だと考えられます。聞き取り調査では「以前は若連に入るのが当たり前だった。でも今は若者は若連に入らないから、消防団の人数も少なくなっている。」というお話から現状を知ることができました。

活動の担い手の固定化により、コミュニティ内の人と人とのつながりが、より強固なものになっていったと考えられます。このつながりは様々なメリットをもたらす一方で、移住者の方にとっては大きな壁になる可能性があります。

また男性メンバーを中心として構成されているため、女性の交流が希薄になり、女性活躍の場が不十分であるということも課題であると感じました。

③戸沢のこれからのために

①行政と協働して取り組むべきこと

●過疎の改善

- ↳・若者が住みたくなくなるようなまちづくり
- ・スローライフを訴えるようなアピール（移住者や関係人口との連携）

●少人数でも農地を守れる仕組みづくり 「戸沢流集落営農」

●農業だけではなく里山にも目を向ける

- ・山に経済的価値を与える

●獣害対策

●新たなコミュニティの形成

- ・住民センターとはまた違う、高齢者が集まれる場
- ・集落の連携を高め移送サービスなどを行う（農村RMOなど）

●移送サービスや地域見守り、気軽に集まれる拠点づくりなど

- ・コミュニティバスの活用



②地域内で取り組めること

●女性が楽しみながら地域とゆるく関われる場を設ける

●若者世代の交流の場を設け、口は出さずに応援する

●他出している次世代に、戸沢の情報発信をする

●堅苦しくない「ゆるい」集まりを大切にする

●伝統文化を仕方なく残すのではなく取捨選択しながら継承する

●あるものを活用した地域再生

- ↳地域資源の見直し



③学生ができること

●学校（小・中学校）での学年行事に大学生が参加する

●勉強に興味を持ってもらえる取り組みを行う

例）オンライン塾

●目的の明確化

- ↳学生がどうしたいのかという率直な意見の提示



④活動を通して、戸沢の未来について私たちが考えたこと

・地図や記録には残らない日々の手仕事や交流の中にこそ、集落の誇りがあり、一緒に手を動かす時間を通じて育まれる連帯感こそが戸沢の真の歴史と魅力であると実感しました。

・1年間を通して戸沢の皆さんと交流させていただいたことで、戸沢の魅力や特色を実感することができました。私たちの活動の意義は、「戸沢の現状を知り、伝えていくこと」であり、その集大成が今回の集落史だと思っています。この集落史が戸沢の未来に貢献することができたら嬉しい。

・1年間戸沢地区に関わることが出来て本当に良い経験が出来ました。自然や食、伝統など自慢できることが沢山ある所だなと活動を通して思いましたが、何より「人」が地域の一番の魅力だと感じています。そこを多くの人に知ってもらいたいですし、もっと学生だからこそできることを見つけていきたいです。

・実際に戸沢地区に足を運び皆さんと関わることで、外側から見ただけでは気付くことのできない「人」の魅力や、助け合いの精神を体感し、日々の生活や交流に楽しみややりがいを感じている方が多いと知りました。だからこそ私たち学生は、何か大きなことから始めようとするのではなく地域内の交流がより充実するような取り組みについて考えるべきだと感じました。



第4章 北戸沢保全会のひとびと

2024～2025年に岩崎ゼミ学生が実施した聞き取り調査では、
下記の皆さんのご協力をいただきました。
ありがとうございました。

(略)

本章では、2024年度に学生がまとめた聞き書きの記録をもとにして、
保全会メンバーの方々を中心に、学生の印象に残った言葉を紹介していきます。
(あいうえお順。年齢は調査当時。)

(以下略)



しめ縄の作り方

作成日：2026年2月20日

作成者：福島大学岩崎ゼミ



【準備するもの】

- ・乾燥した稻藁
- ・麻紐
- ・ハサミ
- ・作業しやすい広さの場所

※藁は作業前に軽く湿らせると折れにくく、撚りやすい

【作り方】

(1) 藁の下の方の余分な葉を取る

(2) 5～6本の束 (A) を30個作る

(3) 藁束を順番に編んで太くする

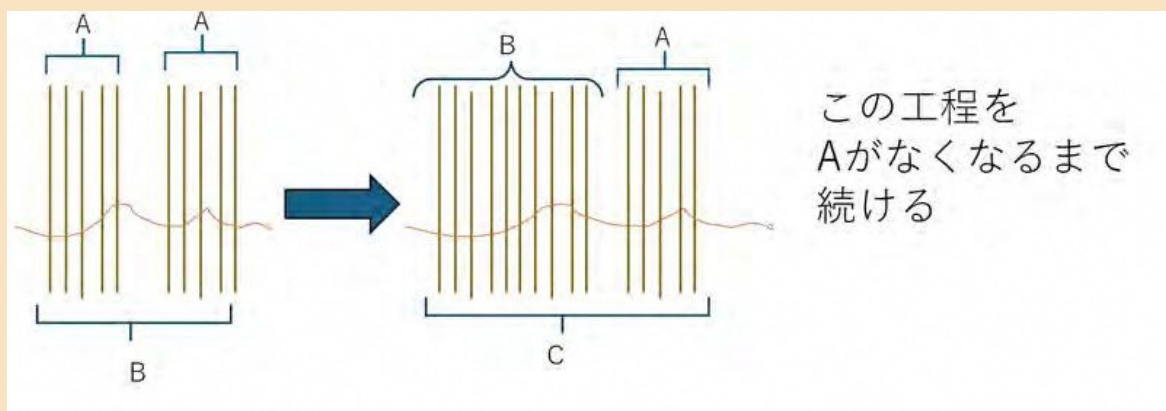
① 藁束Aを2つ並べ、下から20cmのところで麻紐で編む

② できた束に、藁束Aを1つずつ足しながら、同じように編む

③ Aがなくなるまで、この作業を繰り返す

→ 藁の量が徐々に増え、均一な太さの藁束になる

(3) の工程でできた藁束をPとする。



藁束P ➡

(4) 藁束Pを6つ作る



(5) 藁束P 2つを1つに合わせて編む



長い方を編む



（６） 藁束の中に”あんこ”を入れる

あんこ……しめ縄の根元や中心部分をふっくらと太く見せるために、中に詰める芯（藁の束）のこと。短く切った藁などを束ねたもので、見栄えを良くし、立体感を出す役割を果たす。



(7) 見えないように結ぶ



↑できたものを藁束Qとする

(8) (5) ~ (7) を繰り返し、藁束Qを3本作る



(9) 藁束Qを2本合わせて編む



(1 0) (9) でできたものと藁束Qを合わせて編む





完成

(1 1) 藁飾りを3本作る



← これを3本作る

(1 2) 総仕上げ

バランスを見ながら
取り付ける



藁の間に藁飾りを通す





完成

2025年度 集落史
北戸沢の"これまで"と"これから"

福島大学×二本松市北戸沢保全会活動報告書

編集：福島大学岩崎ゼミ

発行日：2026年2月28日

連絡先：〒960-1296 福島市金谷川1番地
福島大学行政政策学類 岩崎由美子研究室